

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：34503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720345

研究課題名(和文) 中世盛期スコットランドにおける歴史叙述としての聖人伝研究

研究課題名(英文) Scottish Hagiography as Historical Narrative in the High Middle Ages

研究代表者

西岡 健司(Nishioka, Kenji)

大手前大学・総合文化学部・講師

研究者番号：70580439

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、12・13世紀のスコットランドにおいて作成された聖人伝を歴史叙述として分析したものである。その結果、多様な地域の集合体からひとつの王国へと統合されていく時代にあって、それぞれ由来を異にする各々の地域において、地域の歴史や「スコットランド」という枠組みがどのように捉えられていたのか、年代記等の歴史叙述からは確認することのできないその多様性が、具体的に示されることとなった。

研究成果の概要(英文)：This research investigates the Scottish saints' lives written in the twelfth and thirteenth centuries as historical writings. In the period, Scotland was being integrated into one kingdom from diverse regions with different historical background. The result of the research reveals the diverse views in each region on its local history and the framework of Scotland, never discovered by historical writings such as chronicles.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：西洋史

キーワード：中世史 スコットランド 聖人伝 歴史叙述

1. 研究開始当初の背景

中世のスコットランドは、ときに 'hybrid kingdom' と形容されるように、極めて複雑な多民族社会を構成した。すなわち、先住民であるピクト人とブリトン人に加えて、アイルランドから移住して来たゲール人(スコット人)、アングロ=サクソン系の中で北方に定着したアングル人(イングランド人)、スカンディナヴィアから襲来したヴァイキングの一派であるノース人、そして、いわゆるノルマン征服以降に渡来したアングロ=ノルマン系のフランス人たちが加わり、相互に多様な関係を取り結びつつ共存のかたちを模索したのである。

結果的には、王権を中心とする王国共同体の発展に伴い、中世盛期には一つの「スコットランド人」から成る一つの「スコットランド」の形成へと向かう。

スコットランドの統合を決定づけたものとしては、13世紀末からの対イングランド独立戦争の影響が極めて重要であるが、王国統合そのものは戦争の結果ではなく、独立を保ちえた要因とみなすのが支配的な見解であり、11~13世紀の過程で、徐々に一つのスコットランドへの統合が進められていったと考えられている。

独立戦争以前の11~13世紀におけるスコットランド観に関する先行研究では、帰結点である一つの「スコットランド人」を所与の前提とし、様々な史料の中で断片的に顕著な形で現れる記述のみを組み合わせ、統一のアイデンティティへと向かう漠然としたイメージが描かれている。その一つの要因は、分析対象とされる叙述史料の数の絶対的な少なさにある。

歴史叙述としての年代記は、独立戦争以前にはわずかしかが存在せず、提供する情報が極めて限られたものでしかないので、年代記から具体的なスコットランド観の変遷を跡付けることは不可能である。

2. 研究の目的

本研究では、これまでスコットランド観の分析にはほとんど利用されてこなかった聖人伝を歴史叙述として丹念に読み説くことによって、当時の人々の多様な過去の捉え方を具体的に明らかにし、一つの「スコットランド人」意識形成への道筋の解明に新たな一石を投ずることを目的とする。

3. 研究の方法

聖人伝は、元来は文字通り聖人の偉業や奇跡を記録した伝記であるが、一方で、一種の歴史叙述として、作品が書かれた当時の歴史観を映す鏡として読み解くことも可能な史

料である。

スコットランドの場合、著名な聖人は中世初期に多いが、彼らの聖人伝はかなり後の時代(特に中世盛期)にまとめられたものが少なくない。こうした聖人伝の中では、聖人が実際に活躍した時代の説明において、書き手の時代の見方が無意識のうちに、あるいは意図的に、組み込まれる傾向にある。

本研究では、個々の聖人伝の叙述を各々が作成された文脈の中で読み解き、同時代の民族意識やスコットランド観の多様な有様を明らかにする。

4. 研究成果

本研究では、スコットランド王国内で民族的な由来を異にする諸地域において作成された多種多様な聖人伝について、個別に分析をおこなった。ゲール系の影響の強い北方の地域からは『聖コルンバ伝』や『聖サーフ伝』、南東地域のアングロ=ノルマン系のものでは『聖ウォルデフ伝』や『聖マーガレット伝』、また、南西地域のブリトン系のものとしては、『聖ニニアン伝』や『聖ケンティゲルン伝』などである。

本報告では、『聖サーフ伝』を具体的な事例としてとりあげ、既に研究成果を公表している『聖ケンティゲルン伝』と比較しつつ、全体像の一端を論じることとする。

(1) 聖サーフ伝

聖サーフについては、複数の異なる史料に記述が残されているが、その内容にある程度の相違が確認されることから、かつてはいくつかの種類の聖人伝が存在していたとみられている。

現存する聖人伝で聖サーフの生涯全体を伝えるのは、ダブリンの Marsh's Library 所蔵の写本に含まれる『聖サーフ伝 *Vita Sancti Servani*』(以下『伝』と略)のみである。この写本は13世紀に書かれたもので、『聖ケンティゲルン伝』も収録しており、もともとはグラスゴー大聖堂が所有していたとみられている。

『伝』の原版がいつ作成されたかを正確に特定することは困難であるが、12世紀に書かれたスコットランドの他の聖人伝と類似の特徴を共有していることや、『伝』に含まれる神学的な議論の部分にアンセルムスの影響が見られることなどから12世紀頃の可能性が高い。遅くとも、聖サーフゆかりのカルロスにシトー会の修道院が建てられた1217年よりは前で、また、『聖ケンティゲルン伝』の中で存在が言及されている聖サーフ伝がこの『伝』であるならば、『聖ケンティゲルン伝』が書かれた1180年頃よりも前ということになる(Alan Macquarrie, *The Saints of Scotland: Essays in Scottish Church*

History, AD450-1093, Edinburgh, 1997, chap.6: St Serf を参照)

(2) 『伝』の描く聖サーフの生涯

『伝』において、聖サーフは中東カナン
の王族の生まれとされる。彼が最終的にスコ
ットランドにやって来て布教をおこなう経緯
について、『伝』の説明はおおむね次のと
おりである。

サーフはアレクサンドリアで教えを受け
た後に修道士となり、やがてカナンに戻って
司教に選出される。その後、天使の声に導か
れてエルサレムやコンスタンティノープル
に滞在した後ローマに至り、当時空位であ
った教皇の座にのぼる。教皇として7年間ロ
ーマで過ごした後、再び天使の声を聞いてア
ルプスを越え、イギリス海峡を渡ってフォ
ース湾に到達した。そこで、当時スコティ
アの修道士であった聖アダムナーンと出
会い、ファイフの地を住处とするように勤
められるが、同地を治める王 Bruide
による迫害の危機にさらされる。しかし、
王の病を癒してファイフを与えられ、カル
ロスに教会を築いて拠点とした。カルロス
での務めが完了すると、リーヴェン島に
赴いて聖アダムナーンと再会し、同島を
与えられて修道院を建て、7年間布教をお
こなった。その後、ファイフ全域を巡って
教会を建立し、奇跡を起こしながら布教
をおこなった後、ダニングで生涯を終えた。
サーフの遺体はカルロスに運ばれ、同地の
教会に埋葬されたという。

(3) 聖サーフの実像と『伝』の描写

まずは、サーフの出自について、カナン
出身を現実として受け入れることは難しく、
また、ゲール系の名前と考えるのも自然で
はない。ブリトン系ないしピクト系の可能
性が高く、マクワーリは後者を最も有力と
みなしている。では、なぜ中東起源の伝説
が作られたのだろうか。

当時のスコットランドの聖人伝におい
ては、カトリックの正統信仰との関係性を
強調するために、概してローマとの繋が
りが強調された。たとえば、聖ケンティ
ゲルンはローマを7度も訪れ、教皇から
助言を受けたとされており、あるいは、
聖ニニアンもローマで学び、教皇から
司教に叙任されたことになっている。こ
の背景には、中世初期のアイランド系教
会とローマ・カトリックの論争、および、
後者による正統信仰の確立がある。しか
がって、聖サーフにローマ教皇としての
経歴が加えられたことには、しかるべき
理由を求めることができる。しかし、ロー
マとの繋がりを作るうえで、出自を中東
に求める必要はない。

ここで注目すべきは、『伝』の描くス
コット人とピクト人、ブリトン人との関
係性である。聖サーフがファイフでの活
動を開始しよ

うとしたとき、王 Bruide との確執が
記されている。Bruide は現実にはピク
ト人たちの王であるが、『伝』は彼をス
コティアの王と記し、当時ピクト人た
ちの王国を保持していたとする。ここ
には、後代のスコット人(ゲール人)に
よるピクト人の統合という歴史認識の
投影が見られる。

聖サーフ信仰の中心であったファイフ
は、12世紀にはゲール系を中心とした
地域であり、『伝』におけるゲール中
心の描き方は、聖サーフの活動範囲
(ファイフ、特に南西部からさらに北
西におよぶ地域)にも端的に示されて
いる。したがって、聖サーフをピクト
人の聖人として描くことが望まれな
かったとしても不思議ではない。

次にブリトン人との関係であるが、『
伝』では聖サーフがアダムナーンから
定住場所として勤められたファイフに
ついて、ブリトン人たちの山から Okhel
と呼ばれる山までという説明が付され
ている。つまり、ブリトン人との間
には境界が意識されており、その後
の布教活動においても、聖サーフが
ブリトン人と関わることはない。

この点で注目されるのは、ブリトン
系伝統をもつ王国南西部のグラスゴー
の司教を描いた『聖ケンティゲルン
伝』における記述との相違である。『
聖ケンティゲルン伝』では、ケン
ティゲルンが少年期に聖サーフの弟
子として教えを受けたことが重要な
経歴として詳しく描かれているが、『
伝』ではケンティゲルンとの関係に
は一切触れられないのである。この二
人の聖人の師弟関係については、ブ
リトン系の伝統を軸にゲールを含む
他の世界との関係性を強調しよう
とした『聖ケンティゲルン伝』側
からの創作である可能性が高い。ち
なみに、聖サーフによる聖ケンティ
ゲルンの教育の逸話は、後には聖
サーフの伝承の中にも取り入れられ
ることになる。15世紀初頭のリー
ヴェン島の聖サーフ修道院長アン
ドリュウ・オヴ・ウィントゥンによ
る *Orygynale Cronykil* には、
聖サーフの生涯が詳しく語られる
中で、彼が同地でケンティゲル
ンを教育したことが明記されている。

さて、聖サーフの実際の出自がピク
ト人であろうとブリトン人であら
うと、『伝』の立場からすれば、ど
ちらも望ましいことではなかった
であろう。『伝』にとっては、
聖サーフの故郷を聖地カナンに求
めることによって、そうした不都合
が回避されると同時に、聖サーフ
の特別性や聖性を高める効果が
得られているといえる。

ところで、『伝』とピクト人、ブリ
テン人との関係性については上記
のとおりであるが、『伝』が作成
された当時のスコットランドを
想起した場合には、王国南部の
イングランド人(アングル人)と
の関係がより重要な要素として
浮上する。しかし、『伝』はイ
ングランド人については、全く
言及をおこなわない。聖サーフ
がアルプスを越えてイギリス海
峡を渡った後は、イングランド
を飛び越し

で一気にフォース湾に至っており、その後もイングランドについてもイングランド人についても触れられることは一切ないのである。

『伝』は聖サーフと聖アダムナーンとの会談にまつわる二つの挿話によってゲールの伝統を強調する立場を明示する一方で、ブリトン人やイングランド人については視野の外に置いているといえる。これは、たとえば『聖ケンティゲルン伝』が、諸々の聖人たちの出会いのエピソードを創作しながら、執筆当時の12世紀のスコットランドを構成していたブリトン・ゲール(スコット)・イングランド(アングル)の諸要素の統合を図ろうとしているのと極めて対照的である(西岡健司「同時代人の見た一二世紀のスコットランド - 二つの聖ケンティゲルン伝の作者の目を通して - 」『スコットランドの歴史と文化』(日本カレドニア学会編、明石書店)、35-52頁、2008年; Kenji Nishioka, 'St Kentigern and the Isle of Britain: Scotland and Britain viewed from Glasgow in the twelfth century', *Haskins Society Journal Japan*, 4, 33-38, 2011.)。つまり、『伝』は極めてゲール限定的な立場を貫いているといえる。

多様な地域が一つの「スコットランド」へと統合されつつある時代の中で、「スコットランド」の聖人としての位置づけを目指した『聖ケンティゲルン伝』と「ゲール」の聖人という印象を強く与える『聖サーフ伝』の存在は、王国統合の過渡期における世界観の多様性を端的に表している。

本報告で具体的にとりあげなかった他の聖人伝においても、それぞれに固有のスコットランド観が示されていることが確認される。それらを総合して公表することが残された課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計1件)

朝治啓三、渡辺節夫、加藤玄編、創元社、中世英仏関係史 1066-1500 - ノルマン征服から百年戦争終結まで、2012、pp.232-248 (第13章「スコットランドと英仏」西岡健司)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西岡 健司 (NISHIOKA KENJI)

大手前大学・総合文化学部・講師

研究者番号：70580439